

「土」とのかかわりから自然と人間を考える

大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所 所長 木全 吉彦 *Written by Yoshiko Kimata*

はじめに

2011年3月11日14時46分、東北地方を襲った東日本大震災で被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

私事ながら、筆者が前任の多木秀雄の後任として、大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所(以下、CEL)所長の発令を受けたのはまさにこの日の朝のことでした。また、本年は当研究所が設立されてから満25年ingtonたり、5月には記念シンポジウムを開催する予定で準備を進めていたところでもありました。地震発生直後で復旧の道筋も見えない状況を勘案して、シンポジウムは延期することとし、そこの発表内容をまとめて7月に発行する予定だった季刊誌「CEL」97号も、企画を練り直さざるを得なくなりました。本号のお届けが今になったのは、このような経緯があったからです。この間、ご連絡も差し上げず、ご心配をおかけしたことをお詫び申し上げます。

さて、未曾有の規模の地震と津波は、ただでさえ過疎・高齢化という構造的課題を抱えて懸命な努力を続けてきた東北地方太平洋沿岸に襲いかかり、一瞬にして業住一体のコミュニティを壊滅させました。そして同時に発生した福島第一原子力発電所の事故は、放射性物質の拡散による健康被害の懸念とエネルギー供給不安をわれわれに突きつけ、今や「安全・安心な社会」「安定的なエネルギー供給構造」への信頼は大きく揺らいでいます。

「第二の敗戦」とまでいわれる今回の震災が、人々の意識、暮らし方をどのように変えるのか、個人と社会、地域コミュニティとの関係に変化は起きるのか、その中で産・官・学の果たすべき役割は何かについて調査・研究することは、今後、私どもCELが取り組むべき重要な課題と考えています。

”3・11以後”とCEL

CELのミッションは、高齢化・グローバル化の進む社会において、人々が「豊かな暮らし」「幸せな人生」を持続的に送るために、何が必要で、何をしなければならぬかを考え、社会インフラ、家庭、住まい、食、文化活動、娯楽、自然との関わり等について、生活者の視点から研究し、住みよい社会づくりに向けて、提言することにあります。

その意味で、今回の大震災が生活者一人ひとりの意識・価値観に与えた影響を正しく把握し、中長期的に起こるであろう生活行動や社会の変化を見通すことができるかどうかは、われわれCELにとって大きなチャレンジになると考えています。

3・11が日本社会の大きな転換点となることは間違いないと思います。これまでの価値観や社会システムが全否定されるわけではありません。エネルギーをふんだんに使うことや、むやみな贅沢を是とするので

はありませんが、行き過ぎたところを見直せば、「豊かさ」や「快適」の追求をあきらめる必要はないでしょうし、自然災害が多いからといって日本をあきらめるわけにもいきません。自然の恵みをフルに生かすつ、自然のもたらす災禍を最小限に食い止める、スリムでスマートな（賢い）暮らし方が、本来、自然とともにある人間にとって究極の幸せではないでしょうか。

今回の地震・津波が引き起こした被害の全貌は、半年を過ぎても未だ見えず、収束のめどが立たない状況が続いています。運命共同体「日本丸」の乗客である私たちは、クルーである政府、自治体、地域コミュニティや、企業、NPOなどと協力してこの難局を乗り越えるため、一人ひとりがその役割を果たさなければなりません。一方でこの時期は、これまで見過ごしてきたかもしれない真の「豊かさ」「幸せ」を再発見し、これからの生き方を模索する良いタイミングといえるのかもしれない。被った痛みが大きいければ大きいだけ、多くを学んでより強くなるというのが日本であり、日本人です。微力ながらCELもその一助となればと願っています。

特集「土のある暮らしと文化」について

季刊誌「CEL」97号では「土のある暮らしと文化」を特集しました。ことさら「不易流行」^{ふえきりゅうこう}を標榜するわけではありませんが、人間らしい暮らしが、文明と自然、未来志向と伝統重視との調和の中にはじめて成り立つものとすれば、時代の潮流を敏感にキャッチすることと併せて、人々の暮らしに関わる根源的なものをテーマとして取り上げることが重要だとCELは考えます。実は、1987年の季刊誌「CEL」創刊号のテーマは「火」、第2号は「水」、そして第3号が「土」でした。四半世紀を経た今、再び「土」に還ることによって、時代の変化を映し出せるのではないかと思います。かと思えば、各界の専門家に寄稿や鼎談をお願いしました。

なお「土のある暮らし」といっても、文字どおり、生活空間に「土そのもの」があるかどうかが問題となるわけではありません。土は水、動植物、建築、都市などさまざまなものと組み合わせることで環境を形成し、効

用を発揮します。その形態、機能の多面性にこそ土の特徴があるのではないのでしょうか。土と土を介してもたらされる自然の恵みや生活文化、個人や社会との関わりについての論考から、土との付き合い方を探っていただければ幸いです。

土のあった風景―日常生活から姿を消す土―

高度経済成長が始まった昭和30年代から40年代にかけて、都市の風景はどのようなものだったのでしょうか。筆者の記憶にあるのは、生家の前の未舗装の道です。雨が降るとズックの靴は泥だらけになり、水溜りの水を吸って中までぐっしょり。少し降りが強い時には泥が跳ねて半ズボンから覗くひざ小僧やふくらはぎに点々としみをつくりまわります。夏の日にはこれが冷たくて気持ち良かったものです。

ちょうど、大林宣彦監督の映画「異人たちの夏」の世界がそれに近いのかも知れません。東京の下町、浅草界隈のしもた屋を舞台に、ステテコ姿の父親（片岡鶴太郎）にムームーというのかアップパーというのか、頭からかぶるワンピースを着てくつろぐ母親（秋吉久美子）、そしてランニングシャツの息子（風間杜夫…実は早くに死別した両親より年上の40歳の設定）が繰り広げるお盆の幽霊譚です。背景には板塀、木の電信柱、土の道は夏の日を照り返して白く、打ち水をすれば鮮やかに黒く…。あの頃の風景にはコンクリートは見当たらず、土の地肌が見えていました。また、素朴画家・原田泰治の世界にも土においては濃厚です。どこにでもありそうな山村の片隅に、田んぼや畑、小川や木々に囲まれた（お土産物屋ではない）茅葺き屋根の家。祖父母や父母が見守る中、四季の自然の中で子どもたちは遊び、走り回る…。

たとえそれが幼時の体験にしか過ぎないとしても、映画や絵画の中でなく実際に見聞きし、においを嗅いだことのある最後の世代も、そろそろ60代に差しかかろうとしています。現代の若い世代にとつての土は、うっかりするとホームセンターで買ってくる袋入りの土、花壇やプランターの中に綺麗に収まった土以外にはなくなってしまう。それほど、都

市生活と土とは距離ができてしまいました。

労働力調査(総務省・統計局)によれば、1953年に1487万人いた農林業の就業者は2010年には234万人へと激減し、就業者全体に占める割合では実に40%から4%へと低下しています。都市化の進展につれて、都市近郊の小規模な兼業農家が農地を手放し、製造業、サービス業の被雇用者に転じたことや、北海道や東北などで機械化・大規模化が進んだことが就業者減少につながっていると思われます。

自身が農林業を営んでいなくても、実家に帰れば両親や親戚、あるいは隣近所に農家があったという人は、ある時期までは、そこそこいたとは思われますが、それも加速度的に減っているはず。このままでは土とともに暮らすことを実感できる機会はますます減っていくでしょう(マッチを擦ったことも裸火を見たこともないため、火が熱いということを知らない子どもたちがいると聞いて驚きましたが、泥の触感を知らない子どもも結構多いのではないのでしょうか)。

■ 土は万物を支える土台——恵みと脅威——

古代ギリシャの自然哲学者たちは、火、水、土、空気は万物の根源をなす四元素であると考えました。その後、2500年近い物理学・化学の進歩を経て、現在の周期表にはH・He・Li・Be・B・K・N・O・F・Ne…『水兵リーベ僕の船…』から始まる118の元素が並んでいます。四大元素論は科学的には否定されましたが、依然としてこの4つが世界を形づくる重要な要素であることに変わりはありません。中でも土は、火(熱)、水、空気(大気)、微生物、肥料成分などを内部に蓄えて植物の生育を支え、動物・人間をつなぐ食物循環の基盤となり、海や河川、湖沼の水を貯める器となつて水循環の基盤となります。

CEL
のジ
らセ
らメ

火や空気については、人間が手を加えることによって部分的には制御できたようにも見えますが、土は依然として原始の姿をそのまま保ち、頑固なまでにどっしりとして人間と対峙しているように見えます。しかし、その圧倒的な質量ゆえに、ひとたび地震や火山噴火などで土(地盤)が動く、被害は甚大なものとなり、残念ながら人は今までのところ有効な対抗手段を持ち得ていません。また、膨大な質量を持ち、想定を超える挙動をするという点では水も同様です。土と水、この2つが内包する巨大なエネルギーが結びついて引き起こされるのが津波であり、大雨による土砂災害であるといえます。われわれはこれを防ぎ切ろうとするのでなく、いかにしてその力をいなし、被害を減じるか(減災)を考え、さらにはその力を、たとえばエネルギーとして有効利用する方法を模索すべきではないでしょうか。

■ おわりに ■

すでに述べたように、都市生活者にとつての土は、火や水のように日常的に見たり、手に触れたりすることも少なくなり、水や空気のように絶えず体内に取り込むわけでもなく、いわば遠い存在になりつつあります。しかし、われわれが生活を営む自然環境を構成するインフラの中のインフラ、文字通り「縁の下の力持ち」である土とこれ以上疎遠になることは、大きな自然の循環システムを人工物によって毀損してもそれに気づかないという危険を冒すことになりはしないでしょうか。人はFather Sky(父なる空)とMother Earth(母なる大地)の間で生まれ、育ち、産み、育て、そして死ぬことを繰り返してきました。「土」を媒介としてこの大きな自然循環系に思いをいたすことによって、地球温暖化のみならず資源枯渇や生態系の破壊という人類が直面する深刻な危機への認識を高め、次の世代に健康な地球を引き継ぐために、今、とるべきアクションが何かを知ることができると考えます。

CEL